土木設計課　小林 優花さん

機械設計課　藤田 明則さん

日本下水道事業団

成長はコミュニケーションから

経験積んで市町村を支援

■成長できる場所

下水道整備を推進するため、昭和47（1972）年に発足した日本下水道事業団（以下、「JS」と言う）。以来、わが国の下水処理場建設の7割に携わるなど、半世紀以上にわたり地方公共団体の支援代行機関として下水道の課題解決に取り組んできた。土木設計課に所属する小林優花さん、機械設計課に所属する藤田明則さんはそれぞれ入社2年目を迎えている。

学生時代、水環境に関する研究室に所属していた小林さん。周囲に水環境業界に就職した先輩がいたことに加え、自身も下水道は人の生活に直結する社会インフラであり、人々の暮らしを支える業界と捉えていた。「公的な機関で働けること、下水道分野以外への異動がないこと」がJS入社の決め手となった。自然が豊かな静岡県の山間で育ち、小学生の頃に下水道が自宅に引かれたことも興味を持つきっかけになったようだ。

多摩川の水辺で水に親しむ少年時代を過ごした藤田さんは、大学院で水処理の研究に従事。下水道に特化しているからこその研修制度の充実ぶり、さまざまなバックボーンを持つ先輩に相談しやすい環境に加え、「自分自身の努力次第で成長できる」と感じてJSへの入社を決断。固い企業風土だと思っていたが、社内外と積極的なコミュニケーションを図る必要があり「柔軟性が大切という点で、良い意味で裏切られた」と前向きに捉える。

■コミュニケーションの重要性

JSは地方公共団体の支援代行機関であり、計画から施工、技術開発など幅広い分野が業務フィールドとなる。小林さんは現在、土木に関する設計をメインに、建設工事、発注・管理、設計などに携わる。時代を反映し老朽化した施設・設備の耐震補強工事が多い。藤田さんは、機械設備（ポンプ、ブロワなど）の更新および設計、工事の発注作業を主として行う。打ち合せに基づき設計資料を作成・見直し、必要であれば上司に確認した上で資料の修正を依頼する。月に2～3回の頻度の現場への出張も、新たな経験を踏む場として、積極的に赴いているという。

綿密な関係性を保つ

藤田さんは工事や機械について自分が理解しなければ仕事が進まないため、日々の学びが重要、と口元を引き締める。1年目から2年目を経て上司にポイントを絞って質問する習慣が身に付いた。フィールドで関わる人と綿密な関係性を保ち、技術の教えを乞う。「コミュニケーション能力は向上したと思う」と振り返る。

小林さんも対話だけではなく、さまざまな形でコミュニケーションを取れるようになった。半面、相手の立場に立って考える力が不足していると痛感し、その向上が課題と考えている。やりがいは「工事発注が一区切りした時の達成感」と語る。

一方、アフターコロナでは、対面で会うことが増加。説明責任という点からも、現地で説明できる機会が増えることを歓迎しながらも、WEBとの併用も業務効率化の観点からは選択肢が広がったと考えている、と口を揃える。

■プライベートも充実

PCに向かっての作業が多いため、2人とも休日は身体を動かしてリフレッシュを図っている。小林さんは今年からジャズダンスを始めた。藤田さんはアカペラサークルをはじめ会社の野球部にも所属し、汗を流している。「メリハリが効き、有休も取りやすい。フレキシブルな働き方ができる」（小林さん）、「ゼロからのスタートでもしっかり教えてもらえるため、若いうちから活躍の場がある」（藤田さん）とJSの魅力を語る。

今後については「工事事業者に迷惑が掛からないよう、経験と技術を身に付けて早めにリスクに気づく人間になりたい」と目前の課題を語る藤田さんと、「下水道事業の計画から施工までを経験し、全体を見て業務ができる人材になっていければ」と遠くを見据える小林さん。市町村の支援代行をしながら、自分が成長することのできる土壌がある。目指す方向性と若い職員の想いが合致した先に、JSのさらなる未来が期待される。

1日のスケジュール〈藤田さんのケース〉

9:30	始業 メール確認
10:00	打合せ準備
10:30	外部との打合せ
12:00	昼休憩
12:50	メール返信対応
14:00	内部協議、資料作成
16:30	事務処理
18:00	退勤

2023(令和5年)12月6日 第2694号 日本下水道新聞 7面掲載
2023(令和5年)12月7日 第5861号 日本水道新聞 7面掲載